

5. 『アラバマ物語』とアメリカン・ヒーロー

2016年2月19日、アメリカの女性作家ハーバー・リー(Harper Lee)が亡くなった。89歳だった。といっても、この作家を知る人は日本では少ないかもしれない。代表作は、1961年に発表された『To kill a mockingbird』(ものまね鳥を殺すには)。邦訳名は、小説の舞台となったアラバマ州をもとに『アラバマ物語』となった。たぶん、「ものまね鳥を殺す」という言葉に込められた寓意が、日本人にはまったく馴染みがないからだろう。1961年にピューリッツァー賞を受賞した。

アメリカにおける黒人の地位向上に大きな役割を果たした小説は、ふたつあると言われる。ひとつは、ストウ夫人によって書かれたあまりにも有名な『アンクル・トムの小屋』(Uncle Tom's Cabin)。もうひとつが、ハーバー・リーの『アラバマ物語』である。『アンクル・トムの小屋』は奴隷制度解放に繋がって南北戦争の遠因となり、『アラバマ物語』は1960年代の公民権運動に繋がっていった。

話が脱線するが、私が初めて黒人と遭遇したのは1951年、つまり私が4歳の頃だったようだ。「ようだ」と書いたのは、私にはその記憶がまったくなく、後年、亡母から聞かされた話だからである。

母は私を連れて、塩釜から仙石(せんせき)線に乗って仙台へ行ったとき、途中駅の苦竹(にがたけ)駅から黒人兵が車内に乗り込み、母と私が座っていた柵形の座席(向かい合わせの4人掛け座席)に座った。私は、黒い肌をした背の高い人間を初めて見て驚嘆したのだろう、口をポカーンと開けたまま、その兵士をジロジロ見つめたそうだ。母は、そんな私をたしなめたが、それでもアングリと口を開けたままだったようだ。兵士は恥ずかしかったのか視線をそらしたが、私は凝視したまま。仙台で電車を降りる直前、その兵士は私にチョコレートをくれたという。

現在、苦竹駅の南側は陸上自衛隊の仙台駐屯地となっている。ネットで調べてみると、太平洋戦争の敗戦までは旧陸軍第二師団と軍需工場があったことがわかった。しかし、敗戦後の1945年9月から1957年11月まで、つまりサンフランシスコ講和条約が発効した1952年以降も、アメリカのGHQが駐屯していた。私が電車内と黒人兵と遭遇したのは、この時代だったのだ。

さて、小説の舞台は、人種差別がはびこる1930年代のアラバマ州の架空の田舎町メイカム。物語の縦糸は、男やもめの弁護士アティカスが、白人女性を暴行したとして容疑をかけられた黒人青年トムを弁護する法廷劇。横糸は、アティカスの近所に住む亡霊ブーを巡る子ども達の冒険。これらの話を、アティカスの9歳のお転婆娘スカウト(ハーバー・リーの少女時代をモデルにしている)の目をおして語られる。アティカスの弁護により、白人女性によって仕掛けられたトムの冤罪が明らかになるのだが、人種偏見に凝り固まった全員白人の陪審員は有罪を下し、絶望したトムは護送中に逃亡し、撃たれて死ぬ。それだけなら行き場のない暗い物語だが、亡霊ブーが、実は子ども達を見守る暖かい存在であることが明かされ、希望の結末を迎える。父アティカスの人権活動を間近に見ながら、スカウトが人間として成長していく物語でもある。

この小説は、発表された翌1962年にほぼ忠実に映画化され、アティカスを演じたグレゴリー・ペックは、この年のアカデミー主演男優賞を受賞している。私は10代後半に、この映画を仙台で観て感動した。つまり、私にとって映画が先にあり、いつの日か原作を英語で読みたいという願望を抱

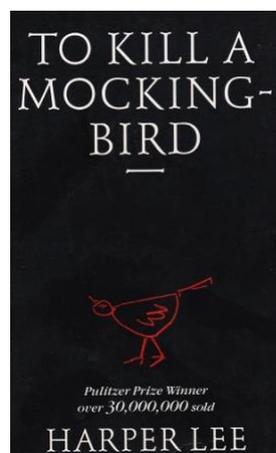
いたまま、50代まで過ごしてきた。そして念願かなって版元の異なる原作を購入し、2度読んだ。

この本を読むと、登場人物とともに笑い、泣いている自分がある。魂を揺さぶるような感動はいったいどこからくるのだろう。偏見に対する戦い、人間としての誇りと良心といった普遍的なテーマを、暖かく、そして深く描いているからだろう。この小説の素晴らしさが、映画を観た35年後に、再び心に染みた。



左：『アラバマ物語』のスカウト。メアリー・バダムが演じた。この映画の魅力の半分は、スカウトのお転婆ぶりに負うところが大きい。

Arrow版の表紙。



2003年、アメリカ映画協会に加盟する数百人の映画関係者が、アメリカ映画で描かれたヒーロー・ベスト50人を選出したことがあった。その様子を描いた約3時間の番組がNHK BSで放映され、50位から1位までのヒーローが、次々に紹介されていた。アメリカ映画なので、私は、ジョン・ウェインの西部劇、ハンフリー・ボガートの探偵、ショーン・コネリーのジェームス・ボンド、シルヴェスター・スタロンのロッキーが上位を占めるだろうと思っていた。そしてそのとおりなのだが、第1位は、私の予想に反し、グレゴリー・ペック演じる弁護士アティカスだった。マッチョ文化のアメリカで、マッチョとは真逆なアティカスとは……。意外であり、アメリカの懐の深さを感じた。この番組の最後は、最晩年を迎えたグレゴリー・ペックが車椅子のまま授賞式の舞台に立つと、会場から雷鳴のようなスタンディング・オベーションを受け、二階席で見守っていたスカウトを演じたメアリー・バダムが舞台に駆け寄り、グレゴリー・ペックと抱擁するところで終わる。

余談になるが、メアリー・バダムは、映画人生としてはこの一作だけに出演し、10歳という若さ（幼さ？）で1962年のアカデミー助演女優賞にノミネートされた。

さらに余談になるが、アメリカの作家トルーマン・カポーティは、少年時代、ハーパー・リーの隣人で幼馴染であった。『アラバマ物語』の中では、スカウトの遊び仲間ディルとして登場する。カポーティの代表作『冷血』は、ハーパー・リーに献呈された。

『アラバマ物語』は、機会があれば、ぜひ鑑賞して欲しい映画のひとつである。

6. 塩尻和子氏講演「イスラームを理解するために」を開催

定年後の活動の場のひとつが社会総合研究所であることは、すでに述べた。そして、私が企画し、実施したいくつかの講演会の中で一番印象に残り、そして楽しかったのは、「イスラームを理解するために -相互理解と対話を目指して-」（2016年9月 塩尻和子氏 筑波大学名誉教授）である。

なぜ、テーマをイスラームにしたのか？ 2015年当時、IS・イスラーム過激派・パリ同時多発テロなどに関する新聞・TV報道を通して、日本に住む多くの人は、イスラームに漠然とした不安を抱いていた。正直に言えば、私もその一人だ。そんな折、同年10月～12月の3カ月間、NHK第二放送のカルチャーラジオ「歴史再発見」という番組の中で、塩尻氏は「イスラームを学ぶ」というテーマで各回30分×13回の講義をされた。私は興味をもって傾聴した。そして考えを変えた。私自身は仏教徒であるが、だからといってイスラームを知らないままでいいはずはない。少しでも多くの方々に、イスラームとはどういう宗教なのか知って欲しい。そう思った。そこで、翌2016年3月の社会総合研究所の理事会で討議を重ねた結果、塩尻氏に講演をお願いすることが決まったのである。

2016年、五月晴れのある日、理事長のOさんと理事のIさんとの三人で、当時、塩尻氏が特命教授をされていた東京国際大学の川越第1キャンパスの研究室を訪問し、講演を依頼した。快諾していただいた。実は、私は「イスラームを学ぶ」で塩尻氏の優しい声を3カ月間も聴き慣れてしまったので、たぶん、人柄も優しい方なのだろうと勝手に想像していた。そんなわけで、私の心の中では旧知のような存在になってしまった。そして実際にお会いし、まさにそのとおりで、この日初めてお目にかかったという感じはまったくしなかった。そんな次第だったので、私がそのことを率直に話すと、塩尻氏は微笑された。研究室の壁一面の書架に並ぶ、背表紙がアラビア文字の蔵書に圧倒されたのを覚えている。

9月開催に向けて随分と力こぶが入った。代々木上原のモスク「東京ジャーミイ」にも見学に行き、事前学習もした。ガイドをしてくれた山下さんの許可を取ってモスク内外の写真を撮り、それをもとに社会総合研究所の定例勉強会で紹介もした。

講演会場は、両国にある江戸東京博物館の学習室。参加者は20歳代～70歳代と幅広く、96名を数えた。講演は分かりやすく、終了後の質疑も的を射たものになった。

講演終了後、懇親会を両国ビューホテル3Fの宴会場「プリマベアラ」で開催した。司会の挨拶と乾杯が終わった直後から、参加者が次々に塩尻氏と名刺交換し、質問の洪水を浴びせた。塩尻氏も関心の高さに驚かれたと同時に、嬉しかったと語られておられた。以下に、参加者からの感想や感謝を一部紹介する。

① ルワンダでバナナ繊維から和紙を作るボランティア活動のTさん（女性）

講演参加を呼びかけていただき、大変ありがとうございました。大盛況の会合でしたね。お疲れ様でした。講師が、これまでの膨大な研究・知見を短時間で分かりやすく話されて、とてもよかったです。特に、宗教（イスラーム）と人間の生活・行動様式との深い結びつきについてのお話が面白かった。そしてイスラームに対する強い思いに感銘を受けました。最後に話されたジハードのお話もよく分かりました。先ずは、御礼まで。

② イラクやスウェーデンで大使をされた Y 氏（男性）

素晴らしい講演でした。感謝です。宗教間対話の大切さを再認識しました。塩尻先生のお人柄が感じられました。また、機会を作って、今度は定例勉強会に来ていただいて、先生を囲んでじっくりとお話しをお聞きしたいですね。

③ ウズベキスタンと日本の交流事業を推進している NPO 法人の代表（女性）

ウズベキスタンにはムスリムの方が多いのに、なぜ豚肉を食べるのだろうと疑問に思っていたが、塩尻氏から豚肉を食べざるをえなかった歴史的背景を聞いて、驚きました。もっとイスラームについて知りたいです。

④ 「成長の限界」で有名なローマクラブの活動を日本に紹介している Y さん（男性）

長くヨーロッパに住み、ローマクラブの活動を通じて西洋文明の一端に触れる機会が多く、サイドのオリエンタリズムや塩尻氏の視点にはうなずかされることが多いです。日本とイスラエルとの武器の共同開発の愚かさを知って驚きました。



懇親会にて塩尻氏（中央）を質問攻めにする参加者。

⑤ 大手旅行会社で海外ツアーの企画を担当している O さん（女性）

先日は、講演会にお誘い頂きありがとうございました。内容は大変興味深く、塩尻先生のお話を伺い、イスラーム世界やイスラーム信者の方々に好感を持ちました。同時に、日本人にイスラームに対する誤った認識を与えてしまっている日本メディアの報道の仕方(例:「IS」「イスラーム過激派」などの新聞記事表現)にも疑問を持つようになりました。今回の講演は一緒に参加した私の友人も喜んでおりました。今後も今回のような講演の機会がありましたら参加したいと思います。

⑥ アラビア語に堪能で、長年、イスラーム圏で仕事をしてきた I 氏（男性）

昨日は社会総合研究所の最大のイベントになりましたね。本当にご苦労様でした。一緒に参加した家内の話では、講演でこれだけ盛大な拍手は初めてだと言っていました。

また、最後の質問に立った赤い服を着た人は大学の先輩で、最近まで大阪経済大学で教授をしていました。懇親会参加予定だったのですが急用で帰宅しました。「今日は素晴らしい講演会でした。設営、準備お疲れ様でした。懇親会にも参加しなかったのですが、急用が入ったので失礼しました。社会総合研究所は有意義な活動をされていると思いました」との伝言がありました。

⑦ 商社社員のT氏（男性）

私もムスリムの方々が温和ということに同感です。一昨年前に仕事でインドネシアに行きましたが、仕事上分からないところをムスリムの女性社員に聞いたところ、自分の仕事を中断して周りの同僚と情報を調べ始めたのには驚きました。親切すぎるかなと(笑)。また、大学4年のときの中国の敦煌旅行で、ユーラシア大陸を横断してきたバックパッカーと知り合いましたが、彼は今まで出会った国の人達の中でイラン人が一番親切で優しい人が多いと言っていたのを記憶しています。

日本のメディア報道も英米メディアの影響を受けているような気がいたします。当たり前のことですが、人間はやはり知らないことには警戒心（ネガティブな反応）を持つものなので、宗教間の対話は大切なことですね。

塩尻先生の講演の続きをご検討されているとのこと、承知いたしました。是非とも参加したいです。ご連絡をお待ちしています。

⑧ 社会総合研究所の理事長O氏から塩尻氏への感謝

一般の講演会においては、分かりやすく、また、示唆に富んだご講演をいただき誠にありがとうございました。各種の予備資料をいただいたこともあり、大変充実した講演になったことに感謝申し上げます。

参加者からは、先生の机上の話だけではない現地での体験、宗教間対話などの事例を引かれた内容で、理解が深まったようでした。また、長時間のご講演の後も、懇親会において、参加者の遠慮のない質問にも丁寧にお答えいただき、参加者は大変満足しております。一方、もっとお話を伺いたい、質問をしたかったという声も多数聞かれております。もう少し人数を絞り、より深掘りしたご講演と質疑の機会をお願いできればと思います。

(参考：半年後の2017年4月、人数を25人に絞って塩尻氏を囲んで勉強会を開催した)

なにはともあれ、講演の企画・実施をしてきた私としては、イスラームそしてムスリムへの理解が僅かでも広がり、嬉しかった。

7. 「朝の読み聞かせ」ボランティア

我家の玄関は、車の往来が少ない裏通りに面しているので、近くの小学校の通学路となっている。登下校時は子ども達の元気でにぎやかな声が聞こえる。また、玄関脇に植えたヤマボウシの幹に、看板「こども110番 こまったときには、すぐおいで」を掲示しているので、下校時には、「おばさん（私の妻のこと）、トイレ借してください」「友達が転んでケガをしたので消毒してください」などと言いながら、玄関ドアが急に開けられ、チンニューされる。そんな出来事が、小学校での「朝の読み聞かせ」活動の下地を作った。

子ども時代の読書体験

宮城県塩釜市の貧しい家庭に育った子どもの頃を振り返ると、両親に読み聞かせをしてもらった記憶はない。母は生来、目が悪かったせいもあって小学校に満足に通えず、十分な読み書きができなかった。読み聞かせどころか、絵本を買ってもらったこともない。昭和20年代には、読み聞かせという文化は日本になかったのではないかと。私が所有した初めての本は、漫画本を別にすれば、カバヤ文庫である。昭和20年代後半から30年代にかけての話であるが、カバヤ食品のキャラメル

を買うと、カバヤ文庫の子ども向け世界文学全集の中から欲しい本と交換できるクーポン券が付いてくる。これを貯めた。本といっても紙質は粗悪だった。しかし、この時代、こうした本をとおして子ども達の夢が世界に広がったのだ。このコラムの読者にも、カバヤ文庫にお世話になった人がいるかもしれない。カバヤ文庫は、岡山市のカバヤ食品の歴史館に保存されていると聞く。いつか訪問してみたい。

私は男3人の子どもに恵まれ、いまは全員、家を巣立っているが、幼時のときに絵本を買ってあげたり、読んで聞かせたりした経験はない。すべて妻任せだった。しかし、定年を迎える2年前、縁あって双子が我家にやって来たときから、毎晩、寝る前に絵本の読み聞かせをするようになった。

ヤング・ママばかりの「朝の読み聞かせ」に参加

私が64歳となる2012年4月、双子が小学校に入学したことを契機に、月数回、朝8時30分から40分までの「朝の読み聞かせ」をすることにした。6年間続けた。

第1回目の打ち合わせが学校の図書室で開かれたとき、出席した私はビックリ。私を除くメンバー20数人が、20代後半から30代後半までのヤング・ママなのである。男性、しかも還暦を過ぎた男性がたったのひとり。非常に気まずく、身の置き場がなかった。読み聞かせボランティアのリーダーを長年務めてきた女性が、てきぱきと議事を進め、私は部屋の片隅で、ひとことも発せず、小さくなっていた。

世代が違い過ぎ、当初は、どう接したらいいのかわからなかったが、次第にメンバーから頼りにされ、いろんな相談を受けるまでになった。後から振り返って思うに、私の方こそ、「読み聞かせ」を聴く子ども達の生き生きした目や表情から、そしてヤング・ママの活力から、元気を貰っていたのだ。

読み聞かせのヤング・ママに囲まれ、ちよっぴり照れ臭い私（後列中央）。小学校の図書室にて。



読み聞かせは初体験なので、我流ではいけないと考え、きちんとした講習の必要を感じていた。そんなとき、海老名市の広報誌に、「読み聞かせと語りのための講座」が掲載されていたのを目に留め、早速申し込みした。たぶん、以前からこうした講習はあったのだろうが、興味がない時代は見逃していたのであろう。いくつかの大学で児童図書に関する非常勤講師を務めるS氏（女性）から、「絵本の選び方」「読み聞かせの準備」「読み聞かせ方」などを教えてもらった。そして、数回の読み聞かせのリハーサルをしたとき、「いい声をしている。しかも、教室の隅々まで行き渡る大きな声

をしている」と褒められた。単純に嬉しい。

読み聞かせデビュー

読み聞かせデビューは6月末だった。初めてなので1年生を担当することにした。さて、何を讀もうか散々考えた末に、『ぼくの大好きなケニアの村』（文 ケリー・クネイン 絵 アナ・ファン 訳小島希里 BL出版）にした。これは双子が大好きな本で、何度も何度も読み聞かせをせがまれたからだ。

アフリカの絵本は原色を好む傾向があり、絵に力強さがある。また、日常生活や遊び、家族内の役割が、日本の子供たちと異なる。たとえば、この本には、朝食のトウモロコシの粥、牛の見張り番、布切れで作ったサッカーボール、炭で味付けしたミルクなどが、次々と語られる。そうしたことが、子供たちに新鮮に映り、興味をもって聴いてくれるのだろう。そう考えた。

当日は早朝に起床し、髭をそり、シャワーを浴びて清潔な服に着替え、リハーサルを2回した。朝食もそこそこに小学校に向かう。校庭では、子ども達の元気な遊び声がする。職員室で先生方に挨拶し、双子の妹がいる1年4組に行く。きょうの読み聞かせの舞台だ。やがて始業のチャイムが鳴り、子ども達が校庭から教室に戻ってくる。私の顔を見るなり、「あっ、ユイちゃん（双子の妹の名前）のグランパだ」といいながら、挨拶をしてくれた。私の家は小学校に近いので、双子のクラスメートが帰宅途中によく立ち寄り、遊んでいくので、何人かとは顔なじみだ。緊張しながら自己紹介、いよいよ絵本を語り始める。子ども達のキラキラした瞳が絵本を見つめ、じっと聞き入る。私も子どもの頃は、こんなきれいな瞳をしていたらどうか？



創意工夫を始める 『スーホの白い馬』

最初の1年間は、メンバーのお母さん方から本の選び方を聴いたり、海老名市の他の小学校と情報交換したりして、試行錯誤しながら読み聞かせの基礎を習得した。しかし、2年目に入ると、通常の「読み聞かせ」に独自の工夫をしたくなった。

二年生は、二学期の終わり頃に、教科書で『スーホの白い馬』を学ぶ。モンゴルの大草原を舞台に、スーホという羊飼いの少年と白い馬との交流、馬頭琴の誕生秘話の物語だ。元々はモンゴルに伝わる民話だったようだが、作家・大塚勇三が再構成し、赤羽末吉画伯が絵を描き、福音館書店から発刊されている。

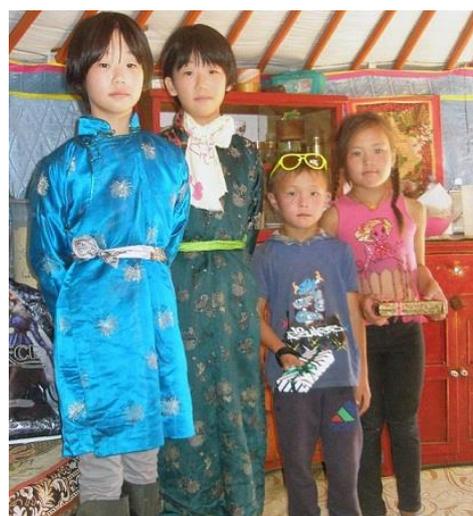
私はこれを題材にすることにした。ネットで調べると、内モンゴルにイラナという演奏家が『スーホの白い馬』を馬頭琴で弾いていることを知った。早速、CD(Jroom社)を購入して聴いてみた。物語にピッタリだ。次に馬頭琴について詳しく調べた。こうした素材をもとに、二学期の中頃、つまり教科書で習う前に、読み聞かせ『スーホの白い馬』を開始した。初めに馬頭琴について絵入りで解説し、続いて、イラナの馬頭琴演奏『美麗の大草原』『スーホの白い馬』をBGMにして読み聞かせ。これが大当たりを取った。子ども達が真剣な眼差しで、絵本のページが開くたびに息を飲む。評判を聞いた二年生担当の先生方やボランティアのお母さん方数人が、教室の後に陣取りし、見学した。小学校の読み聞かせでBGMを使った初めてのケースとなった。

それから4年後の2017年夏、私は双子を連れて『スーホの白い馬』の舞台モンゴルに行った。遊牧民が使うゲルに寝泊まりし、1週間、馬に乗って大草原を駆け巡った。また、ゲルに住む遊牧民の家族を訪ねると、ヨーグルト味のお菓子や馬乳酒を振舞ってくれた。双子が、遊牧民の小さな子どもに日本からのお土産としてチョコとクッキーをプレゼントすると、そのお礼として、双子に子ども用の民族衣装を着せてくれた。楽しい夏休みだった。



モンゴルの大草原。背景に白く小さく見えるのは遊牧民のゲル。ここに寝泊まりしながら、草原に流れる空気を胸一杯に吸って爽快に走った。

遊牧民の住むゲルを訪問すると民族衣装を着せてくれた。馬頭琴も飾ってあった。



「レオナルド・ダ・ヴィンチ」の伝記

4年目に入った。毎学期の開始時、読み聞かせのメンバーが学校の図書室に集まり、その学期のいつ・誰が・どのクラスを担当するかを決めるのだが、5年生や6年生の高学年への読み聞かせは、敬遠される傾向にある。高学年ともなると、絵本に興味を示さない子どもが増えるからだ。そのこと

は、私も気付いていた。メンバーは、「やりにくいから」と言っては高学年の担当を私に依頼する。そこで私は、読み聞かせに更なる工夫を考えた。

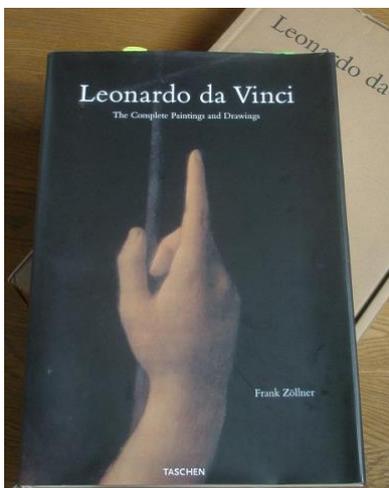
考えたのは、絵本を離れることであった。そのきっかけを話そう。

双子が4年生に進級した折、海老名駅前の本屋さんと一緒にいき、自分で読んでみたい本を好きに選ばせた。その一冊は『10分で読める伝記』(学研)。この本にはお馴染みの、エジソン、ベートーベン、ヘレン・ケラー、野口英世などの伝記が収められている。その中にレオナルド・ダ・ヴィンチの伝記があった。その内容を要約すると、次のようになる。

- a レオナルドは幼児期、自然や生き物を観察するのが好きで、絵に描いていた。
- b レオナルドの才能を知ったお父さんは、レオナルドをベロッキオという職人の弟子にした。
- c ベロッキオのもとで学んだレオナルドは、やがてミラノに出て、創作した絵や彫刻で評判を得た。
- d レオナルドの評判を聞きつけたミラノ大公が、修道院の壁にキリストと12人の弟子が最後の食事をする場面を描いて欲しいと、レオナルドに依頼した。
- e レオナルドは、街でいろいろな人の顔や表情をスケッチし、それを12人の弟子のモデルとした。そして3年の歳月をかけて「最後の晩餐」を完成する。
- f レオナルドは、発明家でもあり科学者でもあった。ヘリコプターやパラシュートの原理を考え、多くをスケッチに残した。
- g また、人体の仕組みにも大きな興味を示し、人体図も数多く残した。
- h レオナルドは左利きで、大量のメモは、鏡文字で右→左へと綴られている。

この伝記を読んだとき、私はある大切な本を失念していたことに気づいた。その本とは、レオナルドの遺した全作品を収録した画集『Leonardo da Vinci』(TASCHEN社)だ。20年ほど前にイタリアから取り寄せたが、あまりにも大きく重い本なので本棚の一番下に横置きし、放置したままにしていたのだ。埃まみれになっていた画集を久しぶりに取り出し、あらためて読み返すと、上記 a~h を裏付ける絵画やスケッチが、すべて含まれているではないか。そうだ、この画集を使って伝記を読めば、子ども達は強い関心を示すのではないか？ しかも、高学年向きだ。

初めての試みは、五年生に設定した。伝記を読みながら、重い本の関連ページを開くのは困難なので、近所に住む5年生のふたりの少年に手伝ってくれるように依頼した。



TASCHEN社から出版された箱入りの豪華本には、「知の巨人」レオナルドが遺したすべての絵画・デザイン・スケッチ・メモが収録されている。50cm×32cm、厚さ9cmと大型で、重量は10Kgを越える。イタリア語と英語の2種類があるが、私の手元にあるのは英語版。20年ほど前にイタリアから取り寄せた。

表紙の絵は、「洗礼者聖ヨハネ」の一部(天国を指す右手)。レオナルドが最後に描いた絵画と言われている。

当日は五月晴れ。校門の近くで、子ども達に朝の挨拶をしながら交通安全をしていた校長先生（女性）と顔を会わせた。私が重そうに本を抱えているのを見て、きょうは何の読み聞かせをするのか尋ねてきた。簡単に内容を話すと、校長先生はミラノのドメニコ会修道院の食堂で修復直後の「最後の晩餐」を鑑賞したことがあり、ぜひ聞きたいと言ってくれた。私が妻を連れてミラノに行ったのは2006年秋で、そのときはまだ修復中で見られなかった。

8時半からの読み聞かせには、校長先生だけでなく、高学年担当の先生方、ボランティアのお母さん方10人が、教室の後で待機していた。開始前に何人の子どもがレオナルド・ダ・ヴィンチについて聞いたことがあるか質問すると、ほとんど全員が知っていた。それなら話しやすい。私は伝記を読み始め、その内容に合わせて、ふたりの少年に画集の関連ページを開いてもらった。レオナルドが小学生の年頃に書いた動物の絵、ベロッキオのもとで描いた「キリストの洗礼」、ミラノの酒場で描いた「最後の晩餐」のモデルのスケッチ、ヘリコプターやパラシュートの構想図、足や肺の人体図、鏡文字のメモなどなど。みな、真剣に画集を見入っていた。



2016年5月、五年生のクラスを対象に初めてレオナルドの伝記を読んだときのスナップ写真。担任の先生が、卒業アルバムに使いたいといって撮影した。開いているページは「最後の晩餐」。

読み聞かせ終了後、校長先生と廊下で立ち話をした。そして、ふだん、落ち着きがない男子までが文字通り机から身を乗り出して画集を食い入るように見ていたこと、私語もなく、みな聞き入っていたことなどを話してくれた。ヤッター!!

その後、先生方の依頼で、五年生と六年生の全クラスでレオナルドの伝記を話した。

2016年の夏休み、家族を連れてパリに行ったとき、レオナルドが最晩年を過ごしたロアール川流域にあるル・クロ・リュセまで足を延ばした。ここは、レオナルドが終生、手放さなかった「モナ・リサ」「洗礼者聖ヨハネ」「聖アンナと聖母子」の三作品が残されていた館だ。館には、実際に使った工房や居間、そして収集品がそのまま残されていた。さらにレオナルドの発案したグライダー・戦車・水揚げ機・投石機などの精巧な模型が展示されており、天才科学者・技術者を彷彿とさせる。館からは、レオナルドをイタリアから招聘したフランソワ1世の住んだアンボワーズ城が望めた。



復元されたレオナルドの工房の一部。

館の中庭から遠くフランソワ 1 世のアンボワーズ城を望む。中庭にはレオナルドが植えた薬草畑があった。



ルーブル美術館にて。奥の方に「モナ・リサ」が見える。比較的空いている時間帯を狙って入館したが、「モナ・リサ」の前だけ人だかりが多く、また警戒も厳重だった。

双子が首からぶらさげているのは、私が作った ID カード。万が一、双子が迷子になった場合を考えて、氏名・年齢・連絡先・パスポート番号などを記載した。双子を連れて海外に行くときは、いつもこの ID カードを身に着けさせた。

小学校に国語辞典を寄贈

読み聞かせのボランティアとして図書室に出入りしていると、新しい図書が極めて少ないことに気付く。図書室の司書・・・海老名市内の小学校数校の図書室を兼務する若い女性の司書・・・に質問すると、年間数万円の予算しかなく、欲しい図書をなかなか買えないとのことだった。

海老名市は、決して財政が厳しい状況ではない。市債の発行残高も少なく、全国の自治体でも財政が健全な市に属する。それでも、市内の小中学校の図書購入に当てる予算は、少ないようだ。

そこで、ボランティア活動で楽しい体験ができたお礼として、また双子がお世話になったお礼として、2017年7月、新しい図書を購入するためのまとまった金額の寄付を、双子の担任の先生を通じて小学校に申し出た。どんな本を購入するかは、小学校に一任。数日後、校長先生から電話があった。寄付へのお礼を述べた後、寄付金を児童が使う国語辞典の購入に使いたい、それでも構わないか、という相談だった。何の図書に使うかは、学校の自由裁量にお任せしたうえでの寄付なので、校長先生の申し出を承諾した。

1週間後、用事があって図書室に行った。部屋の片隅に小さな移動式書架があるのは以前から知っていたが、よくよく見ると、そこにはボロボロになった国語辞典が40冊近く並んでいた。司書に聞くと、国語の授業で辞書を使うとき、当番の子ども達がこの書架を教室に運び、授業が終われば、また図書室に戻すことになっているという。そして、ここにある辞典は15年近く使われ、ところどころ破損しているだけでなく、内容も古くなったので、新しい辞書と交換したいが、そのための予算がないとこぼした。そこで私は、1週間前の校長先生と交わした電話の内容を話すと、彼女は、私からの寄付の申し出をすでに知っていた。さらに、実は高学年担当の先生数人と相談したうえで、辞書の購入を校長先生に推奨したことを打ち明けてくれた。合点がいった。

後日、校長先生から手紙があり、寄付金の9割を新しい国語辞典の購入に、残りを他の本の購入に当てたことを述べ、明細書が同封されていた。

(次回号に続く)